

# 古代難波史論——とくに天武朝難波宮と聖武朝難波宮について——

## A Study on Ancient History of Naniwa District

— Especially Palaces of Emperor Temmu and Emperor Shōmu —

直 木 孝次郎

### はじめに

古代の難波の歴史は長い。縄文時代や弥生時代の人骨や遺物を出土する森の宮貝塚の時代、伝説的な応神天皇の難波大隅宮、あるいは仁徳天皇の難波高津宮の時代は措くとしても、上町台地上にすくなくとも十六棟の大倉庫群<sup>〔1〕</sup>の造営された五世紀以後、難波の地は、いくたびか政治・経済の重要な歴史の展開する舞台となった。そして七世紀中葉には孝徳天皇の難波長柄豊碕宮が営まれ、

同世紀の後半には天武天皇によって、飛鳥浄御原宮に対する副都として難波宮が造られ、八世紀前半、聖武天皇は新たに難波宮の建設に着手し、約二十年後には難波遷都の勅が出された。

聖武朝の難波遷都は実際には実現しなかったが、副都としての難波宮は、八世紀末の桓武天皇による長岡宮造営までは存続する。

五世紀からかぞえて約四百年の歴史である。

この四百年の歴史のうち、本稿は副題に示したように天武朝難波宮と聖武朝難波宮の造営の意味を考察しようとするのであるが、そのまえに天武朝に至るまでの難波の地のもつ歴史的な意味を、主要な三つの時期について検討する。それが天武朝難波宮の歴史の意味を考えるのに有益であり、ひいては聖武朝難波宮を考えるのにも役立つと思うからである。

### 一

難波地域の歴史の上で第一の画期となるのは、五世紀の中葉前後の時期であろう。これを画期とするのは、このころ難波の堀江が開削され、大阪湾から大阪平野の北部にひろがる沼沢地——河

内湖——へ至る安定した水路がひらけた<sup>(2)</sup>と考えるからである。難波の港、いわゆる難波津は、その水路である堀江に通ずるラグーンの一つにあったと思われるが、難波津からの船は堀江をさかのぼって河内湖に出ると、そこからさらに大和川へはいって大和へ行くことも、淀川にはいって山背・近江、あるいは伊賀へ行くこともできる。堀江の開通は、難波の港の機能を飛躍的に拡大した。大阪湾岸の港としては、難波津より早く住吉津が栄えていたと考えられる。その理由はかつて詳論したのでここでは簡単にすることが、住吉津のある地域——のちの住吉郡——には海の神、航海の神である表筒男・中筒男・底筒男のいわゆる住吉三神を祭る社が鎮座するのをはじめ、『延喜式』神名帳には大海<sup>おほなつみ</sup>神社・船玉神社など、海と船とにかかわりのある神社が合計三社ある。これに対し難波津のある東生郡・西成郡の地域では、式内社が四社あるが、直接海にかかわる神は一社もない。それは住吉津が早くひらけたために、海の神、船の神は住吉津の近くに祭られて人々の信仰を集め、難波津はあとから開けたために、あらたに海の神を祭るに到らなかったものと思われる。

六世紀にはいつてのことだが、欽明天皇元年(『紀』の紀年に拠れば五三二年)に大伴大連金村が物部大連尾輿に對朝鮮外交の失敗を弾劾されて「住吉の宅」に引退したことが『日本書紀』に伝えられているが、物部氏の宅が難波にあったという『書紀』崇峻前紀の伝えとを対比すると、六世紀前半における大伴氏の衰退と物

部氏の興隆の原因の一つに、両氏がそれぞれ宅を置いていた住吉津の衰えと難波津の栄えがあったのではないかと思われる。

近年(一九八七年)、堀江に近い上町台地の北端部、現在の大阪市中央区大手前四丁目で見えられた五世紀後半ごろと推定される大倉庫群<sup>(3)</sup>は、難波津の栄えを象徴すると言ってよい。検出された倉庫数は十六棟、各棟の大きさはそれぞれ多少の相違はあるが、床面積の平均は約九二平方メートル、総床面積は約一四七〇平方メートルである。五世紀の大型倉庫郡といえば、それまで最大とされていた和歌山市鳴瀧の七棟からなるものであったが、その総床面積は約四五〇平方メートルで、難波の倉庫群の三分の一以下である。難波の倉庫群が当時としてはいかに大規模であったかがわかる。

この倉庫群に何が収納されたかは不明であるが、五世紀後半といえは倭の五王が中国の南朝に通航・貢納した時代である。百済・新羅など朝鮮の船の往来も少なくなかったであろう。倉庫郡の収納物は、瀬戸内海の水運によって運ばれる西日本各地域、および大和川・淀川の水運による畿内地域の産物を主とするであろうが、中国南朝や朝鮮諸国からもたらされた物資の収められた可能性も少なくあるまい。難波堀江の開通を私は五世紀中葉前後と考えるが、その時以来難波は、日本における経済と交通の中心的地位を占めるようになったと思われる。

経済的發展を、難波の第一の画期の特色としたい。

朝鮮との交渉（敏達—崇峻朝における）

年 次	百 済	新 羅	日 本
敏達 3 (574)		11月	
4 (575)	2 月	6 月	4 月 羅・済
6 (577)	11月		5 月 済
8 (579)		10月	
9 (580)		6 月	
11 (582)		10月	
12 (583)	是年		7 月 済, 是年済
13 (584)			2 月 任那
用明 2 (587)	6 月		
崇峻 1 (588)			是年, 済
4 (591)			11月 羅・任那

備考：①史料は日本書紀。②百済，新羅の欄は，使者が日本に来た月・年を示し，帰国のことは省略。③日本の欄は，日本の使者（宰を含む）の出発の月・年を示す。④済は百済，羅は新羅を示す。いずれも日本の使者の向かった国。

難波の歴史の第二の画期は、六世紀末の五九三年から六二八年にいたる推古朝であろう。これより前、六世紀前半のころから新羅の興隆がめざましく、六世紀中葉には日本と関係の深い加羅諸国が新羅に亡され、朝鮮半島の国際関係は急迫した。日本と朝鮮三国はたがいに使者を派遣し、時には出兵して情勢をうかがった。日本へはとくに百済・新羅の使者の来航が多かったことは『書紀』に見えるが（左の表参照）、朝鮮の使者の船の多くは難波に入港したであろう。このほか、百済王に仕える日系の高級官人である日羅が敏達十二年に來日し、難波を経由して大和の敏達宮へ行っ

たという『書紀』の伝えもある。

東アジアの形勢は、五八一年に隋が興り、五八九年に南朝の陳を亡して中国本土を統一するに及んで一層緊迫の度をました。百済と高句麗は五八一年ただちに隋に遣使・朝貢し、新羅はややおくれて五九四年に遣使・朝貢、日本はさらにおくれるが六〇〇年（推古八）に朝貢した。倭王武が四七八年に南朝宋に朝貢して以來約百二十年ぶりのことである。この年を以て難波史の第二の画期のはじまりとし、六世紀をその前史とした方がよいかもしれない。

六世紀代から難波には外客を迎えるための施設が造られていた。<sup>⑥</sup> 宿泊の施設と思われる「難波館」は『書紀』継体六年（五一

二十二月条・敏達十二年（五八三）条に見えるが、推古十六年（六〇八）に隋使裴世清を迎えるため「新しき館」を難波の「高麗館」のはとりに造ったとある（『書紀』）。外客との応接、交渉を行なう庁舎である「大郡」は欽明二十二年（五六二）条に見えるが、推古十六年の隋使も「難波大郡」で饗応された。また隋使の難波津入港に際しては、飾船三十艘が江口で出迎えたことあり、舒明四年（六三二）十月に唐使高表仁の來日のおりも、飾船三十二艘が江口で迎えている。難波は交通上の要衝というだけでなく、外交上の要地となり、政府の機関も設置されたのである。六世紀の始めの安閑朝設置の伝承をもつ難波屯倉も、難波津の管理や外客の接待に関与したであろう。

このような情勢を考えると、難波の第二の画期の特色として、

外交に関係する要地となったことを挙げるべきであろう。それとともに外交と関係の深い外国文化、とくに仏教受容の要地であることも、この時期の特色である。文献の上では敏達六年に難波に大別王寺のあったことが『書紀』にみえるが、遺跡は定かではない。本格的な寺院としては、推古朝に営まれた四天王寺が早い例である。七世紀中葉になると、文献上では阿曇寺(『書紀』・百濟寺(『日本書紀』)、遺跡では堂が芝廂寺等が知られるが、推古朝における仏教受容がその基礎となっているといえよう。外交と外来文化の受容とを、第二の画期の特色としたい。

第三の画期が六世紀中葉、孝徳天皇の難波遷都の時期であることは、説明を要しないであろう。しかし難波遷都に関する『書紀』の記述で一、二注意すべき点を述べておく。

その一つは、大化元年十二月条に、「天皇、都を難波長柄豊碕に遷す」とある記事の意味である。孝徳の長柄豊碕宮への最初の行幸は白雉二年(六五二)十二月、宮の落成は白雉三年九月と『書紀』にみえるから、大化元年十二月に長柄豊碕宮への遷都が行なわれたのではないことは明らかである。「難波長柄豊碕」というのは、この段階では宮名でなく、ひしゃくなどの柄のように長く延びている上町台地の先端部を指した語であろう。都をここへ遷すというのは、大和の飛鳥を去って、難波の上町台地の北部へ遷ることを意味すると解すべきであろう。

しかし多年住みなれた奈良盆地南部の地を去って、大阪平野の

西辺で大きな湖(河内湖)と潮のわき立つ海(大阪湾)にはさまれた難波へ遷るのは、容易でなかったようである。『書紀』の記事をみると、大化二年正月条に「天皇、子代の離宮に御す」とあるのが遷都の最初の記事であるが、大化二年二月二十二日条に「天皇、子代離宮より還る」とある。天皇は難波の子代離宮から大和飛鳥の宮へ帰ったのである。ついで同年九月条に「天皇、蝦蟇行宮に御す」とある。この行宮の位置は明らかでないが、蝦蟇が川津の宛て字とすると、川の津すなわち難波津を意味し、津の近くの施設を利用・改造して行宮としたと思われる。

ここでもう一つ注意されるのは、子代宮も蝦蟇宮も離宮あるいは行宮と書かれ、一時的な仮りの皇居であったと思われることである。大化二年九月までは本格的な遷都は行なわれていないのである。大化三年正月条に「朝廷に射す」とあるのが事実ならば、射礼が行なわれたのは飛鳥の朝廷であつた可能性が強い。蝦蟇宮のつぎにみえるのは小郡宮で、『書紀』には大化三年条に、

是歳、小郡を壊ちて宮を営む。天皇、小郡宮に處りて、礼法を定む。

とある。小郡宮は離宮とも行宮ともいわない。この記事が難波への正式の遷都を示す最初のものである。

小郡宮から長柄豊碕宮へ至る経過は省略するが、前述のように長柄豊碕宮が白雉三年九月に成ったことについては、『書紀』の同年同月条に「宮造ること已に訖る」と記されている。

ところで難波遷都がこの時期に断行された事情であるが、中国大陸には隋に代ってそれより強大な国力を有する唐帝国が成立し、その圧力が次第に東に及び、東アジアの国際関係が緊迫することによるだろう。六四〇年、唐は西域の高昌国を亡すと、いよいよ東方進出の準備をはじめ、六四五年、まさに日本で大化改新がはじまる年に高句麗攻撃を開始した。この形勢に対し、高句麗・百済・新羅の三国はそれぞれに内政を改革して国家権力の強化をはかった。日本も例外たりえない。中大兄皇子らによる蘇我本宗家の打倒はその第一着手であり、つづいて大化の新政が企画され、スタートする。難波遷都もその一環と理解すべきであろう。

こうして難波に長柄豊碕宮が造られたのであるが、このところから孝徳天皇と中大兄皇子のあいだに隙が生じたらしく、長柄豊碕宮の成った翌年の白雉四年（六五三）、中大兄は皇極太上天皇・孝徳皇后間人皇女・皇弟らを率いて「倭飛鳥河辺行宮」に遷居する。「公卿大夫・百官人ら、皆随いて遷る」とあるから、政権の中核は難波の宮をはなれて飛鳥に帰ったと考えられる。その理由については諸説があるが、省略する。いずれにせよ、これ以後長柄豊碕宮は、都としての実を失なったといわねばならない。難波の地が名実ともに古代国家の政治の中心であったのは、大化三年から白雉四年に至る六年余りのことであった。

しかしその期間、難波は日本の首都であった。難波地域の第三の画期の特色を政治の中心とすることに異論をもつ人はあるま

い。

## 二

経済と交通の隆盛する地となった第一の画期、外交と外来文化受容の要地となった第二の画期、都が建設され政治の中心となった第三の画期、以上の三つの時期を経て、七世紀後半の天武朝に難波地域は第四の画期を迎える。

この時期の難波が注目されるのは、いうまでもなく天武十二年（六八三）十二月に出された詔によって難波宮が再興され、副都（陪都ともいう）となったことである。それより約三十年前、孝徳天皇と中大兄皇子の確執、および孝徳の死によって廃された難波宮が、なぜこの時に復活したのであろうか。それは天武天皇が難波の重要性を認識したからであらうが、変転する東アジアの国際情勢からも難波が重視されるようになったと考えられる。

孝徳天皇の後をついで、飛鳥板蓋宮で即位した斉明天皇朝以後の情勢を概観するとつぎのようである。日本の朝廷は唐・高句麗・新羅に遣使し、朝鮮三国の使者の来朝を受けるといふ平和外交を基本としていたが、<sup>(9)</sup> 斉明六年（六六〇）百済が唐と新羅の攻撃により国都扶余は陥落し、国王義慈が唐に降って、百済が亡んでから、日本の姿勢も変化した。朝廷は百済遺臣の要請により百済再興の援助にふみ切り、来日していた百済の王子豊璋を百済の故

地に衛送するとともに、斉明七年（六六二）から天智二年（六六三）にかけて二万七千と称する大軍を朝鮮に派遣した。

周知のようにこの大軍は白村江の戦いで唐の水軍に惨敗し、百済はまったく亡んだ。天智天皇（即位以前なので正しくは中大兄皇子）は対馬や筑紫など西日本の各地に山城を築き、大宰府に水城を造り、対馬・壹伎・筑紫に防人と烽を置くなど、国防を厳にするとともに、都を大和から近江の大津に移して、唐や新羅の来襲に備えた。このように準備を整えたうえで天智七年（六六八）、中大兄は正式に即位するが、同じ年に高句麗は唐・新羅連合軍のために滅亡した。

日本の危機は深まった。事実、唐は日本侵攻の計画を立てていたらしいが、それが実現しなかった主要な原因は、唐に対する朝鮮民族の強い抵抗にあった。そのさきがけは六七〇年（天智九）におこる高句麗遺臣の挙兵であるが、抵抗の主力は挙兵を援助した新羅である。新羅は同じ年から唐の支配する百済の故地に侵入し、戦いをくり返しながら次第に唐の占領軍を駆逐して行く。

この間、日本に対して唐・新羅の双方から援軍派遣の要請があったらしいが、日本は中立を守って動かなかった。白村江敗戦の惨憺たる記憶を忘れていなかったことによるだろうが、天智朝末年から大友皇子執政の近江朝廷は、国内に大海人皇子という有力な対立勢力を抱えていて、海外出兵の余裕はなかった。また近江朝廷は百済の遺臣である多くの貴族・官人を廷臣として有してい

たが、彼らにとっては唐も新羅も仇敵であるという事情も、いくらかは作用したであろう。

六七二年、近江朝廷の恐れていた大海人皇子がついに反乱に立ちあがって朝廷を倒し、都を六年ぶりに大和に遷し、飛鳥浄御原に都し、翌年即位する（『書紀』に従って、この年を天武二年とする）。朝廷の構成は一変したが、新羅は引きつづき近江朝に対すると同様遣使・進調の姿勢を崩さなかった。強大な唐を敵とする以上、日本との友好関係は何としても維持しなければならなかったからであろう。天武が飛鳥に都してから天武六年にいたるまでの外交関係記事を『書紀』より摘記するとつぎのようである（耽羅は省略）。

	(月) 外国の使者の往来	(月) 日本の使者の往来
二年	閏六、新羅遣使、騰極を賀す。先皇の喪を弔う。 八、高麗朝貢、新羅騰極使を京に喚す。 九、新羅使を難波に饗す。 十一、新羅・高麗の使人を筑紫に饗す。	
四年	二、新羅遣使進調 四、新羅使王子忠元、難波に到る。 八、忠元、難波を出発。新羅・高麗使を難波に饗す。	七、遣新羅使、出発。

	(月) 外国の使者の往来	(月) 日本の使者の往来
五年	十一、新羅遣使して政を請い、進調。高麗遣使朝貢。新羅、高麗使を筑紫に送る。	二、遣新羅使、帰国。 十、遣新羅使、出発。
六年	三、新羅使人を都に召す。 五、新羅人、血鹿嶋に漂着。 八、新羅使に遭難の新羅人を付して本土に帰らす。	二、遣新羅使、帰国。
七年	是歳、新羅送使、筑紫に到る。新羅使は不着、遭難した模様。	
八年	正、新羅送使、京に向かう。	

この表をみて気づくことはいろいろあるが、さしあたり三つの点を指摘しておく。

一、新羅使は二年に一度来朝している。天武四年のつきには天武五年十一月に來日記事があるが、おそらく十一月は筑紫への來着であって、大和へはいるのは六年三月であろう。八年の使者は遭難か。

二、新羅使は筑紫でも饗応されているが、二年度と六年度は都(京)に召され、四年度は難波に四カ月も滞在しているから、その間に都にも行ったと思われる。

三、六六八年(天智七)に亡んだ高句麗の使者が來日している

	(月) 外国の使者の往来	(月) 日本の使者の往来
八年	二、高麗朝貢使、新羅に送られて筑紫に來着。 十、新羅使朝貢、金・銀その他を献ず。	九、遣新羅使、帰国。 九、遣高麗使、帰国。
九年	五、高麗朝貢使、新羅に送られて筑紫に來着。 六、新羅送使、帰国。 十一、新羅、遣使進調。	
十年	四、前年の高麗使を筑紫に饗す。 六、前年の新羅使を筑紫に饗す。 十、新羅、遣使貢調。金・銀その他を献ず。 十二使者を筑紫に遣わして、新羅使を饗す。	七、遣新羅使・遣高麗使、出発。
十一年	六、高麗使、新羅に送られて筑紫に來着。 八、高麗の客を筑紫に饗す。	

が、新羅使とはほぼ同時期に來日していることからすると、新羅国内に存する亡命政権からの使者であろう。  
なお日本からの使者も新羅に遣わされているが、この表だけでは回数が少なく、定期的遣使かどうかはわからない。

天武八年始めに入朝の予定であったと思われる新羅使は、前述のように遭難し、送使のみが入京したようである。それ以後の新羅・高句麗の使者の動向をつぎに記す。

	外国の使者の往来 (月)	日本の使者の往来 (月)
十二年	十一、新羅、遣使進調。	
十三年	十二、新羅、遣唐留学生・百濟役の捕虜らを筑紫に送る。	四、遣新羅使出発。 五、遣高麗使出発。
十四年	三、前年の新羅送使を筑紫に饗す。 十一、新羅、遣使して政を請い、進調。	九、遣高麗使帰国。
朱鳥元年	正、前年の新羅使を饗する使者を發遣。 四、新羅使を饗するため、川原寺の伎樂を筑紫に運ぶ。 四、新羅の調を筑紫より貢上。 五、新羅使を筑紫に饗す。	

この表をみると、新羅使がおよそ二年一回来日している（天武八年、同十年、同十二年、同十四年に来日）こと、高句麗の使者が新羅使とともに来日している（新羅が高麗使を送って来日している）こと、すなわち天武八年正月までの表でみた一と三とは同じであるが、新羅使が招かれて都にはいったとした二の点は、どうやら違っているらしい。新羅使は天武八年二月以後は都にはいつていないと思われるのである。

なぜなら第一に、新羅使が都に召されたことや入京したことを示す記事が見えないのである。都で饗応されたことはもちろん、難波で饗された記事もなく、「饗す」とあるのはすべて筑紫であ

る（十年六月・十二月、十四年三月、朱鳥元年五月）。八年正月まででは「京に喚す」（二年八月）「都に召す」（六年三月）「京に向う」（八年正月）とあるほか、「難波に饗す」の記事は二年九月と四年八月にみえる。

九年十一月の新羅使は、翌十年六月に筑紫で饗されているから、その間に入京したという想像も可能だが、それならなぜ難波または都での饗応記事がないのか。十年十月の新羅使の場合は、新羅使の進調に対して朝廷は使者をわざわざ筑紫に遣して饗応している。新羅使が入京したなら、こんな手間をかける必要はない。さらに十四年十一月の新羅使の進調には、翌朱鳥元年四月には饗応のために川原寺の伎樂を筑紫に運び、同月新羅の調を筑紫より貢上させている。このときだけのことでなく、天武八年以後は、新羅使を筑紫にとどめて調の品を受けとり、それだけを朝廷に運び、使者は筑紫で饗応して帰国させたと考えざるを得ないのである。

ではなぜそのように日本は新羅使の待遇を変えたのか、またなぜ天武八年正月以後にそうしたのか。新羅使を筑紫にとどめて都に入れないのは、新羅を警戒しての処置と思われる。天武八年（六七九）前後に日本が新羅を警戒し、恐れねばならないような日羅間の変化が起ったのか。それがこの問題を解く鍵であろう。今までに多くの説が出されているが、以下この観点から私見を述べる。

これはそれほどむずかしい問題ではない。唐の高宗は上元一、



二年（わが天武三、四年）に最後の新羅征討を試みるが成功せず、新羅から謝罪の意を表したのでこれを許すという形で面目を立てて兵を引き、『旧唐書』地理志に、「上元三年二月、安東府（安東都護府）を遼東郡故城に移し置き、儀鳳二年（天武六）、又新城に移し置く」とあるように、朝鮮半島を放棄した。<sup>15</sup>つまり新羅は天武五年に対唐戦争に勝ち、天武六年に確定したのである。このことを日本の朝廷は天武八年正月に入京した新羅送使から知らされたのではなからうか。六年三月に都へ召した新羅使人から聞いた可能性もないではないが、この使人は五年十一月に筑紫に到着しているらしいから、新羅本国を出発したのはそれ以前である。それほど詳しい情報はわが朝廷には伝えられなかったであろう。しかし天武七年に新羅を出発した新羅送使は唐羅戦争の結末——新羅の勝利——を十分に承知していたはずである。それを知った朝廷は、強大な唐に打ち勝った新羅を警戒しないわけにいかない。

それゆえにこの送使の入京以後、新羅使を筑紫にとどめ、日本の国情や防衛の態勢を知らせないようにしたのであろう。

その一方で朝廷は、難波と難波から大和への道を固める。天武六年三月の新羅使の入京のあと、同年十月に内大錦下丹比公麻呂を「摂津職大夫」に任じていたが、八年十一月には「初めて関を竜田山・大坂山に置く。仍りて難波に羅城を築く」と『書紀』にみえるのは、そのための処置である（但し「摂津職大夫」の語には『書紀』編者の潤色があるであろう<sup>16</sup>）。とくにこれ以前は難波にも飛鳥に

も、これ以後の藤原京・平城京にも築かれなかった羅城がこのとき難波に造られたことは、当時の朝廷が国防に危機感を抱いていたことを語る。そしてこのとき日本に攻め寄せる強国といえば、新羅以外には考えられない。

天武十二年十二月十七日に難波造都の詔を発した背景ないし理由は、従来から言われているように、唐が首都長安の他に副都洛陽を持つことになったことがあるが、私はそれに加えてこうした国際政治の危機感を挙げたい。この詔を発する直前の同年十一月四日に、「諸国に詔して、陣法を習わしむ」と『書紀』にみえるのも偶然とは思われない。

本節のはじめに私は天武朝に難波地域は第四の画期を迎えること記したが、厳密には画期は摂津職大夫の置かれた天武六年以後で、画期の特色は軍事的性格にあると考える。

以下詳細は略するが、そのうち新羅使が大和の都にはいったと思われる最初は、持統六年十一月条にみえる朴億徳の一行であろう。それより以前、持統元年九月に新羅の王子金霜林等の使者が国政奏請と進調のために筑紫に来たが、朝廷は饗応の使者を遣わして翌二年三月に筑紫館で饗し、帰国させている。持統三年四月に新羅は天武の喪を弔う使者として金道那等を遣わした。朝廷は翌五月に土師禰麻呂を遣わして新羅の弔使が先例に違うことをとがめる詔を宣せしめ、六月に筑紫の小郡で饗応（原文は「設す」）した。京に入ったことは記されていない。入京せずに筑紫から帰

ったとみるべきであろう。

そのつぎに持統四年九月、留学僧や唐の捕虜となっていた大伴部博麻を送って筑紫に來航した新羅使金高訓に対する処遇（とくに饗応）は、天武十三年に來た新羅の送使の例にならえという詔が筑紫大宰に下っている。天武十三年十二月に留学生や百濟役の捕虜を送ってきた新羅送使は入京せず、十四年三月に筑紫で饗せられた。このたびの送使も筑紫限りで帰国したとみられる。

新羅使で都にはいった最初の例は、前述した持統天皇六年（六九二）の使者であろう。この年十一月に、「新羅の朴憶徳を難波に饗祿す」と『書紀』にみえる。さらに『続日本紀』には、文武元年（六九七）十月に來朝した新羅使が、同二年正月元日日本の「文武百寮」とともに大極殿で天皇に「拝賀」したとある。持統天皇即位のころから東アジアの情勢が平穩となり、日本の国内政治も安定したと朝廷とくに持統が見定めたからであろう。

### 三

天武天皇が天武十二年十二月に再興に着手した難波宮は、二年二カ月後の朱鳥元年（六八六）正月に火災にあった。『書紀』に「宮室悉く焚く」とあり、発掘調査によって前期難波宮の遺構には広範囲にわたって火災の跡のあることが知られ、『書紀』の記述を裏づける。難波宮の再建がしばらく見送られたのは、災害による

損失が大きかったことにもよるだろうが、朱鳥元年九月に天武天皇が死去、その翌年に大津皇子が謀反の故に死罪、即位が期待されていた皇太子の草壁皇子が、天武の葬儀の終了の五カ月後、持統三年四月に死去、と政界をゆるがす事故があいついたことにもよるだろう。

持統天皇の難波行幸の記事は『書紀』には見えないが、文武天皇は文武三年（六九六）正月と慶雲三年（七〇六）九月に、元正天皇は養老元年（七一七）二月に、それぞれ難波に行幸した記事が『続日本紀』（以下『統紀』）にみえる。元明天皇の難波行幸は『統紀』にはみえないが、『扶桑略記』や『皇代記』には和銅三年（七一〇）三月の平城遷都のとき、「難波宮より奈良京に移御す」とある。これが信用できれば、元明も即位間もないころに難波へ行幸したことになる。元明の行幸にはやや疑問があるが、文武や元正の行幸記事は信じてよいから、八世紀以後も難波に天皇や貴族の宿泊可能な何らかの施設があったと考えられる。しかし発掘調査の成果からすれば、八世紀初頭には前期難波宮の地域からまとまった建築遺構は発見されておらず、この地域に限っていえば、本格的な宮殿・官衙の建築の再開は聖武天皇の時代まで待たねばならない。

聖武が藤原不比等の第三子宇合を知造難波宮事に任じて、難波宮の再興に着手したのは即位二年目の神龜三年（七二六）十月のことである。宇合はこのとき従三位の高位にあり、聖武の難波宮

再興にかける熱意の強さを思わせる。おそらく聖武は、難波宮の造営を企てた天武天皇の直系の曾孫という自覚を強く持ち、天武の業を継ぐという意識があったのであろう。それは天武のかかわりの深い吉野にしばしば行幸を試みていることから想像できる。

聖武は神亀元年（七二四）二月四日に即位し、同日および六日、二十二日に上級の男女官人と中級官人の叙位を行なったあと、三月一日に吉野宮に行幸（五日に帰還）、翌二年五月にも吉野離宮に行幸した。後者の行幸は『統紀』にみえないが、『万葉集』巻六・九二〇番の歌の詞書に、「神亀二年乙丑夏五月、芳野離宮に幸する時、笠朝臣金村作歌」と明記されており、疑うに及ぶまい。山部赤人の名作「み吉野の象山きさやまのまの木末こゆえにはここだもさわく鳥の声かも」等も、この時に詠まれた。そのあと、やや年は隔たるが、天平八年六月から七月にかけて芳野離宮に行幸したことが『統紀』にみえ、『万葉集』にはそのときの山部赤人の応詔歌（巻六・一〇〇五番他）がある。

聖武の前の元正天皇は、養老七年五月九日に芳野離宮に幸している（『統紀』）。皇太子首親王（聖武）も同行したのであろう。養老七年の翌年が神亀元年であるから、聖武は養老七年・神亀元年・二年と三年つづけて吉野を尋ねたことになる。そして神亀三年に難波宮再興の業が開始される。それが聖武の天武朝回想と無縁とは言えないであろう。

元正は草壁皇子と阿閉皇女（阿部とも書く。元明天皇）の間に生れ、天武の直系の孫であるが、阿閉皇女は天智と蘇我姪娘との間に生れ、天武直系ではない。この阿閉皇女が元明天皇として在位した慶雲四年（七〇七）から和銅八年にいたる八年間に吉野行幸の記録がみえないのは、この系譜（七）と関係がありそうである。天武の孫の文武は大宝元年と二年に吉野離宮に幸している（『統紀』）。吉野と難波はこのころ天皇家の人々により天武天皇とのかかわりで追憶され思慕され、宮廷の貴族・官人にも影響を与えていたと思われる。

神亀三年に始まる難波宮造営の業は次第に進み、天平四年（七三二）三月ごろに一段落したらしく、藤原宇合以下仕丁以上に物を賜わったが、造宮のことは同年九月に正五位下石川朝臣枚夫を造難波宮長官に任じて進められた。聖武は天平六年三月難波宮に行幸し、陪従の百官衛士以上および造難波官司・国郡司等に禄を賜わって同月に帰京し、半年後の同年九月には、難波京の宅地が有位の官人に班給された。この宅地班給は、山本幸男氏（八）が指摘するように、天武十二年十二月の副都制施行の詔文に「先ず難波に都つくらむと欲ほう。是を以て百寮の者、各往きて家地を請え」とあることと照応する。この時点で「難波京は、名実ともに副都としての様相をとるに至った」（山本幸男）と言ってよい。天武の企画は聖武の手で実現されたのである。

天武天皇への聖武の思いが難波宮と京の造営の進行とともに深

まったことは、天平十五年五月五日に恭仁宮の内裏に群臣を宴し、皇太子阿倍内親王に五節舞を舞わしめたときに、太上天皇（元正）に奏した宣命にもあらわれている。宣命は右大臣橘諸兄に詔して奏させたのであるが、そのはじめに、

掛けまくも畏き飛鳥浄御原宮に、大八洲知しめしし聖の天皇命、天下を治め賜ひ平げ賜ひて思はし坐さく、上下を齊へ和らげて、動きなく静かにあらしむるには、礼と楽と二つ並べてし、平らけく長くあるべしと神ながらも思はし坐して、此の舞を始め賜ひ造り賜ひきと聞きと聞食して（中略）、皇太子斯の王に学はし頂き荷たしめて、我が皇天皇の大前に貢る事を奏す。

とある。飛鳥浄御原宮で大八洲を治めた天皇は天武が天下を治め、上下の秩序をととのえるために始めたこの五節の舞を、皇太子に学ばせ体得させて太上天皇にお目にかける、というのである。天平十五年五月といえば、藤原広嗣の九州での乱が引き金となって聖武が平城京を捨てた天平十二年十月から三年目、政情はかならずしも安泰とはいいがたい。そのなかで聖武は改めて天武の政治を思い出しているのである。

その翌年、聖武は難波への遷都を思い立ったようで、かなり根強い反対を押し切って、閏正月十一日、みずから難波宮に行幸する。聖武が難波遷都を思い立った理由はさまざまあるだろうが、天武思慕の高まりもその理由の一つと考えてよからう。

聖武の難波行幸は、恭仁宮から駅鈴や内外印（天皇御璽と太政官印）を取り寄せ、諸司や朝集使らを難波に召すなど、長期にわたる、遷都に移行する可能性の高いことを思わせた。ところが聖武は、二月二十四日「三嶋路を取りて紫香樂宮に行幸す」と『統紀』にみえ、にわかに難波を去る。このあたりの経過はよく知られているし、私もかつて詳論<sup>19</sup>したことがあるので省略するが、聖武が難波を離れたあと太上天皇元正と左大臣橘諸兄が難波に残り、二月二十六日に橘諸兄が勅を宣して、「今、難波宮を以て定めて皇都と為す」と言ったという『統紀』の記事はなほだ興味深い。

というのは前述した天平十五年五月五日に皇太子が五節の舞を舞ったときの宣命も、聖武の詔によって諸兄が奏しているからである。その場合は宣命は太上天皇に奏上され、今回の宣は天下の百姓に対するものであるが、諸兄の傍らに太上天皇がいるのは十カ月前の五節の舞の時と同様である。諸兄と元正太上天皇の発した遷都の詔は、天平十五年五月の諸兄の奏した聖武の宣命の延長上にある。難波に残留した諸兄と元正とは、聖武は諸般の事情のために難波を去ったが、難波遷都こそ天武回帰を願う聖武の本意であると信じていたであろう。

元正らの願いは実現せず、彼女は同年十一月に甲賀宮（紫香樂宮に同じ）に幸し、翌十七年には甲賀宮も廃されて、五月聖武は平城宮に帰る。しかし勿論、難波宮は桓武天皇の延暦年間まで維持され、難波の繁栄は続くのである。

交通・経済の観点からみると、八世紀の難波の栄えは七世紀以来一貫しており、いつからを難波の第五番目の画期とするかはむずかしいが、政治的な観点を加えるならば、難波宮再興のために藤原宇合が知造難波宮事に任命された神亀三年以後とすべきであろう。そしてその特色は天武朝への回帰にあるとしたい。

さきに私は天武朝における第四の画期の特色を軍事的性格にあるとした(二三ページ)。八世紀の難波について述べるのに、今まで外交および軍事の問題に触れなかったが、天武朝がそうであったように奈良時代も、聖武朝にはいつて外交関係が緊張してくるのである。その発端は七世紀末以来の中国東北地方(旧満州)東南部における渤海の興隆である。渤海は勢力を朝鮮半島北部にひろげ、神亀四年にはじめて使者を日本に送った。使者は同年十二月に入朝し、翌五年正月国書を奉呈して隣国として親交を結ぶことを申し入れた。渤海は新羅との対抗上、日本の武力援助を望んでいた<sup>(20)</sup>のである。『三国史記』新羅本紀には、天平三年(七三一)にあたる聖德王三十年四月、「日本国の兵船三百艘、海を越えて我が東辺を襲う」とある。石母田正氏や山本幸男氏<sup>(21)</sup>の推定するように、渤海の働きかけの結果であろう。

この抗争のあと、新羅も日本もともに相手国に使者を送る。新羅の使者は天平四年五月に入朝して、来航の期を三年に一度と定め、六月に帰国する。日本の使者は八月十一日に帰ってくる。朝廷に帰還の報告をした日付は『統紀』にみえないが、この日がそ

れに当るのだろう。その六日後の八月十七日に東海・東山・山陰・西海の四道に節度使が任命されるのは、すでに多くの研究者によって指摘されているように、遣新羅使の報告の結果とみてよからう。朝廷は新羅に対して警戒の必要を感じたのである。節度使任命と同日に遣唐使が任命されるのも、新羅との関係が緊張するのと無関係ではあるまい。新羅と対立関係にはいったことについて、唐の了解を求めることが、この使節の目的の一つであると思われる。

第五の画期の特色として「天武朝への回帰」を挙げたが、それは単なる憧憬や希望ではなく、天武朝が国際的・軍事的緊張のもとにあったように、聖武朝も同じ情況に置かれていたのである。難波宮の再興はそうした情勢のもとに進められた。新羅使を迎えるためにも難波には壮麗な宮殿が必要であった。節度使任命の翌月(天平四年九月)に石川枚夫が造難波宮長官に任じられたのも、この観点から考えるべきであろう。その翌十月に始めて造客館司が置かれるのも同様である。

## むすび

以上、五世紀以後の難波の歴史を五つの画期に分けて論じた。その各画期の時期と特色を改めて記すと、つぎのようである。

第一の画期。五世紀中葉前後、経済的發展。

第二の画期。六世紀末以後三十余年の推古朝、外交上の要地。  
 第三の画期。七世紀中葉の孝徳朝、政治の中心。  
 第四の画期。七世紀後半の天武朝、軍事的性格。  
 第五の画期。八世紀の第二四半期の聖武朝、天武朝への回帰と国際的緊張。

このように書きならべてみると、当然のことながら難波の歴史は東アジアの国際関係と深く結びついていることを痛感する。第一の画期の特色としてあげた経済的發展は、本稿では主として国内の問題について述べたが、この時期はいわゆる倭の五王の時代で、国際関係の展開が難波の歴史と深くかわっていることはいうまでもない。

もう一つ感ずるのは、桓武朝に難波宮が廃された理由が理解しやすいことである。桓武天皇の即位が天武系の朝廷から天智系の朝廷への転換を意味することはよく知られているが、延暦三年（七八四）長岡宮が造営されると、まず廃されたのが難波宮であったのは、再興難波宮（後期難波宮）が第三節に詳論したように、天武朝回帰を意図して造営されたからであろう。

難波宮は廃されても難波津はなお活動をつづけ、難波の歴史は平安時代にも存続するが、古代難波の繁栄は八世紀末で転機を迎えた。古代難波史論もここで筆を止めることとする。

注

(1) 積山洋・南秀雄「ふたつの大倉庫群」（直木孝次郎・小笠原好彦編『クラと古代王権』ミネルヴァ書房、一九九一年）。

(2) 直木孝次郎「難波津と難波の堀江」（前掲『クラと古代王権』）。

(3) 日下雅義「難波津の位置をめぐって」（同氏『古代景観の復原』中央公論社、一九九一年）。

(4) 直木孝次郎、注（2）論文。

(5) この大倉庫群については、注（1）にあげた『クラと古代王権』を参照されたい。『大阪府史』第二巻第三章第三節（一九九〇年）にも中尾芳治の考察「五世紀の大型建物群」がある。

(6) 直木孝次郎「難波の発展」（『大阪府史』第二巻第一章第四節第2項）、同「大化以前の難波」（『大阪府史』第一巻、第五章第一節、一九八八年）。同「孝徳朝の難波宮——小郡宮を中心に——」（『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館、一九九四年）。

(7) このことは直木孝次郎「大化改新私見」（『難波宮と難波津の研究』注（6））でも述べた。

(8) 直接には孝徳天皇と中大兄皇子との対立が原因だが、難波遷都を主導した中大兄が八年後になぜ大和へ帰ることを主張したのかが疑問とされる。そこで難波遷都を主導したのは実は中大兄ではなく、孝徳であったとする意見も出されている。しかし私は八年の間に東アジアの国際関係が緊迫の度を加え、さきに難波遷都を主張し実行した中大兄も、海辺に都を置くことの危険を感じたことが、大和への遷都の理由と考える。

(9) 直木孝次郎「百濟滅亡後の国際関係」（『朝鮮学報』一四七、一九九三年）。

(10) 『三國史記』新羅本紀の文武王十一年七月条の安東都護府都護薛

仁貴にあてた文武王の報書の中に、「又消息を通じて云う、国家(唐を指す)船艘を修理し、外倭国を征伐するに託し、其の実新羅を打たんと欲す。(下略)」とある。唐が日本攻撃を計画していた可能性は十分にある。松田好弘「天智朝の外交について」(『立命館文学』四一五一四一七合併号、一九八〇年)。

(1) 直木孝次郎「近江朝末年における日唐関係」(『古代日本と朝鮮・中国』講談社、一九八八年)。

朝廷首脳部のメンバーは交替するが、天智十年正月に大錦下を授けられた沙宅紹明は、天武二年閏六月に没したとき、天武は恩を降して外小紫位を贈ったことが『書紀』にみえる。百済系の官人は天智朝から天武朝へそのまま勤務していたことが知られる。

して、新羅の客忠平を饗す」とある。

田村円澄氏は、天武朝に來日した新羅の使者のなかには「六六八年（天武六）三月に入京した清平らの例もあるが、しかし筑紫にとどまり、ここで用務をすまし、饗をうけて帰国するのが例であった。

(中略) アスカの宮廷では、新羅の使者を難波ないし飛鳥に迎えることは考慮せられていなかった」(『大宰府前史小論』『九州文化史研究所紀要』二二号、一九七六年) という。しかし二年八月、四年

四月、八年正月の使者は入京したようで、田村説は成りたたない。なお、新羅の清平を京に召した天武六年三月は六七七年である。田

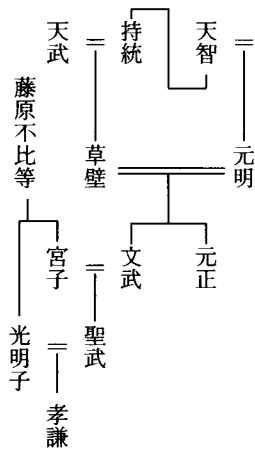
村氏の文には誤植があるのではないか。酒寄雅志氏は、天武の朝廷の新羅使への対応には天武元年から十年までの間、二つの形態があり、「一つは新羅遣日使送使および進調使・高句麗人使を筑紫で饗応しただけで帰国させているが、もう一つは賀騰極使・王子・請政使等の入京を許すという形態である」(『七・八世紀の大宰府』『国

学院雑誌』八〇—一、一九七五年」とする。考察は精密になっているが、天武八年までの新羅使は送使を除いてすべて入京しており、二つの形態があったとは言えない。またなぜ天武十年以後入京を認めなくなったかについては、「外国正使を飛鳥宮に迎え入れることのできない内部の状況もあったらしい」と述べるだけで不十分である。

池内宏「高句麗滅亡後の遺民の叛乱及び唐と新羅の関係」(『満鮮史研究』上世第二冊、吉川弘文館、一九六〇年)。

四等官の長官を表すのに大夫の語を用いるのは大宝令制にはじまると考えられる。直木孝次郎「大宝令前官制についての二、三の考察」(井上光貞博士退官記念会編『古代史論叢』中巻、一九七八年)。

蘇我姪娘



山本幸男「難波宮の消長」、『大阪府史』第二章第四節、一九九〇年。

直木孝次郎「天平十六年の難波遷都をめぐる」(『飛鳥奈良時代の研究』塙書房、一九七五年)。

(二) 山本幸男「聖武朝の難波宮再興」(『続日本紀研究』二五九、一九八八年)。

石母田正「国家成立史における国際的契機」(『日本の古代国家』)

第一章、岩波書店、一九七一年）、山本幸男「聖武朝の難波宮再興」

（注（20）論文）。

（22）直木孝次郎「難波宮の停止と和氣清麻呂」（『難波宮と難波津の研究』注（6））。

追記

1. 注（14）で取りあげた天武八年から持統六年まで新羅の使者が入京していない問題は、田島公氏も論文「外交と儀礼」（岸俊男編『日本の古代』7、中央公論社、一九八六年）で考察を加え、「このような政策の原因の一つは外国使が畿内に入ることを制限し、国家の外交権を皇権のもとに確立しようとしたことと関係があると思われる」とする。しかしなぜその政策が天武八年から実施されたかは、明らかにされていない。

2. 二七ページ下段で、天平四年十月に造客館司が置かれたことに論及したが、この造客館司は平城京内の客館の造営に当る官司とする説がある。或いはそうかもしれないが、摂津、おそらく難波にも客館（鴻臚館）があったことは、『続日本後紀』承和十一年十月戊子（九日）条にみえる。